

論文

ISOの思想と日本社会

— ISO制度の文化論的考察と組織の個性化 —

小竹茂夫

Shigeo KOTAKE

(機械工学科 Department of Mechanical Engineering)

(Received September 16, 1999)

Abstract

The concept of ISO system, ISO9000s and ISO14000s, is based on the self-acting, self-determining and self-sustaining principle in the self-improvement process of our organization. This philosophy will suggest a new parameter in our society, which is independent from the principles of economics. The concept of ISO is sociologically discussed by comparing the groupism of Japanese society, called "SEKEN" in Japanese. Although SEKEN is lack of self-determining mechanism, by introducing a self-evaluation system inside of the organization, it can achieve the self-actualized and self-acquired society under the concept of ISO.

Key words: ISO9000s, ISO14000s, groupism, Japanese society, self-sustaining

1. 序論

近年の ISO9000, ISO14000 シリーズの取得ブームはすごい勢いである。世界の中でも ISO の取得率の伸びは、欧州の一部の国を除けば、トップクラスであると言う。昨日も本屋の店頭に並ぶ ISO 関連の本の多さに圧倒されてしまった。そしてそれらの本の中身は、もっぱら ISO 取得の How-to に焦点が絞られているようだ。先日会った卒業生も、これからの企業は ISO が大切であり、これ無くしては、競争に勝てないかと熱っぽく語っていた。ホームページを開けば、ISO を取得する事がいかに急務であるか、各企業の必死な様子が伝わってくる。日本人は、きめ細かな民族性を持ち、品質管理や環境保護にいかに熱心であるか、ということを感じてしまうような、そんな出来事である。

いや待てよ、何だか、妙に似ているものを思い出さないか？ そうだ、受験の頃感じた、あの切迫感である。みんなが勉強しているのに、こんなことでは乗り遅れてしまうという恐怖感である。受験参考書には、専ら受験技術の How-to が書かれており、講習会や塾なども盛んであった。そんなに勉強してどうなると言うのか？ その後に一体何があるのか？ 答えも無いままにがむしゃらにがんばる、そんな世界が今の子供達にも続いている。

ちょっと茶化したような書き出しで申し訳ない。要するに、市場原理とは異なる視点を与えるために制度化された ISO ですら、現在の日本では、お受験同様な騒ぎようで、パロディー化されそうな気がしてならない。何がそうさせるのか？ 筆者は、日本人特有の価値感である"世間"ではないかと思う。日本人は、高尚な理想からよりむしろ、隣り近所や同僚に良い顔をしたいたい思い勉強や出世に励むのであり、会社は、同業他社といった世間に遅れまいと ISO の取得に励むのである。ちなみに学者も、学会や大学(世間)と深く関わっており、学問への意志の出所は、似たようなものかもしれない。つまり世間が、ISO の取得に走らせている、そんな状況に思えてならない。世界標準を自任する ISO は、世界の様々な社会システムと

折り合っていく必要のあるものではあるが、世間が深く関わる日本社会は、ISO との関わりにも特殊な面がでてきているようだ。

ISO は、従来の法による規制とは大きく異なる点があり、筆者は、これに関わるに連れて、その背景にある主張である”自発性の重視”を知るにつけ、驚かされると共に、魅せられてきた。現在は、その新たな社会システムのあり方を指し示すべく、この思想的可能性に大きく期待するところである。ここで注意したいのは、筆者のいう“ISO の思想”とは、ISO9000 から後に見られる”各事業者自身に目標を設定させ、自己管理をおこなうことにより、社会全体をある目標に導く”という社会システム的思想である。ISO は元来、世界貿易を推進することを目的とし、異なる社会間の障壁を取り除くために考案された国際システムであり、前述した ISO の思想も国際社会に広く適応するために生まれた”妥協”の産物かもしれない。しかしながら、ここに用いられている思想は、新たな社会システムを定義するものであり、様々な問題について広範な適応が可能であると考えられる。筆者は、この思想そのものを ISO9000 や 14000 などの実務内容と区別するために、“ISO の思想”と呼ぶことにする。

ひょっとすると、我々日本人は、学問が人生を豊かにするためにあるのに、受験地獄で苦しんでいるように、ISO を勘違いして取り扱ってはいないだろうか、危惧している。そして現代人は、効率や経済価値を重視するあまり、これに押し潰されそうにさえなっているのかもしれない。そして、経済価値とは異なるベクトルを供給しようとする ISO のシステムでさえ、苦痛と困難をもたらすものになりかねない。

そこで、本報告では、特に、日本の文化と風土に焦点を当てて、

1. ISO の思想の根底にあるものは何か？

2. 日本社会は、ISO の思想とどのように関わるべきか。

について考察をおこなった。我々が考えるこれらの問題についての結論から先に言うと、

1. ISO の思想には、組織の”自発性”への期待が根本にあり、

2. 日本社会を内発的な個性的なものへと緩やかに変革する契機とするべきであり、

3. そのためには、社会の内部に自らを評価し導く仕組みを作る必要がある。

ということである。特に、“個性化”が、これからの日本が目指すべき姿であると考え、ISO の思想が、この個性化に果たす役割と個性化を促す仕組みについて考察をおこなった。

今日の ISO の認証取得についての意識の高まりは、主として輸出を目的とする企業などが、国際社会の動きに合わせた動きであり、管理・運営において、技術的・経済的な側面としての興味が中心であるにすぎないが、社会に浸透し、時間を経るに従って、文化的な問題が重要になると思われる。日本は、未だに、“恥の文化”や”世間”が幅を利かす閉鎖された社会であり、国際規格の導入となると、それらとの間に大きな摩擦を引き起こす可能性がある。筆者は、この日本社会の独自性を否定も肯定もしないが、うまく関わっていく方策を考えるため、ISO の文化論について研究する必要があると思う。いや、むしろ日本の社会の特徴を利用した積極的な ISO の思想的展開が必要であると思う。

話しは若干変わるが、近年、経済不況のあおりから、バブル期には見られなかった悲観論が日本全体を覆っている。それとともに従来の日本型システムの欠点や刷新を望む声も少なくない。国立大学も行政法人化をめぐる新たな一步を模索しているのが現状である。これらの改革は全て、組織が自らの中に新たに個性的な仕組みを作り得るかにかかっており、これは、ISO の思想の求めているものと同じである。最近、多くの知識人達により、日本人の欠点として、個の自立のなさが指摘されているが(例えば、大江健三郎の”新しい人[1]”),これは明治の頃より福沢諭吉[2]によって指摘されていたことに他ならない。個人の欠点は組織の欠点ともなって現在に至っており、社会全体が新たな一步がなかなか踏み出せない、そんなジレンマの中にいる。個性化が叫ばれながら、なかなか自らを変革することのできない体質は、どこにあるのか？本報告では、ISO の思想を通じて、日本人が、抱える問題についても考察できたらと思う。

2. ISO の思想

ISO の歴史や起源は、ISO 本部のホームページに詳しく、ISO9000,ISO14000 の規格の内容は、本としてさえ出版されている。しかし、それらの中には、これから述べる ISO の思想が明確に述べられている訳ではない。しかし、ISO の制度は、9000 シリーズ以降、従来のネジや電気製品の規格といった個々の取り決めから、社会システムに関わる基準へと変貌しつつあるようだ。

筆者が、ISO に携わる研究者やマネージャーらと話していて、彼らが真っ先に口にするこの制度の感想のひとつには、法的拘束力と比べると抜け穴も思えるその自発性を主体としたシステムの構造がある。ともすれば大学の自己点検評価にも似た、大元の行動規範を個々の事業所の自発的行動に頼ったシステムであり、同じ ISO を取得した機関においても、その取り組みがまちまちであり、同じ規則が守られている

とは、とても言いがたい。それと対称的に、ある規則を厳密に守らせる方法として、“法律”がある。これに抵触するものは、何らかの罰則を以って処罰されるため、社会の構成員は、この枠組から外れることによって、生活することができない。しかし、普段の生活において、社会の構成員全員が、“法律すれすれ”の行動をおこなっている訳でもなく、日常の規範は、やはりカントで言うところの“我が内なる道徳律[3]”であろう。どれだけ胸に手を当てて“やましい”ことがない様に努力するかは、個人個人の自発的行動(ISO的思想)であろう。

ISOの思想は、ヨーロッパで始まった。現在のものは、英国によって制度化されたものに違いないが、ドイツ国内などでは、既にそれと同等のものがあり、汎ヨーロッパ的な考えといえる。この点、以下に述べる西洋とは、広くヨーロッパに共通する文化を指すものといえる。一方で、今世紀の社会を動かす基本原理は、資本主義を代表とする市場主義経済であり、これもヨーロッパで始まったものの、現在、この主義の権化は、紛れもなくアメリカ合衆国であろう。もう一つ忘れてはならないことは、ルネサンス以降広まった人間中心主義(人文主義)・進歩主義であり、これも根深く現代の我々に浸透している。これに対し、近年における地球環境の破壊から、安易な経済原理・人間中心主義が、反省を求められていることは、周知の事実である。

我々が述べる“ISOの思想”とは、各組織が、自発的・自主的に目標および評価をおこなう社会システムを指し、現在の人間による制御を離れた進歩主義の暴走を止めるべく、経済原理(全てをお金で換算する主義)に対抗しうるパラメーターを構築しうるものであり、法的拘束とは異なる手法を提言するものであると考えている。それでは、この枠の中で、どのように対抗軸を定めていくか？それは、おのおのの文化を背負った個々の組織が自ら考えなければならない事柄である。以下は、その答えを求めべく日本文化の背景について考察したい。

3. ISOの思想と文化との関連

3.1 西洋思想と日本思想

西洋では、神と人間は、常に静的な安定した(stableな)関係であり、日々の行動は、現世を任された人が神に代わって営む人為的な世の中との関りである。神聖なる神は、自らが手下すことはなく、世の中は神の予定調和の内にある。そのため人々は、世界の幾何学性を重んじ、神と個人との契約(法)に基づいて、社会を秩序立てる。一方、日本は、諸行無常、輪廻転生、アジア的混沌からなる自然の一部としての人の中に“和”を求める国であり、世の中は、常に移り行く流れ(flow)である(なんだか、鴨長明である)。この中に、リジッドな(硬い)西洋と、柔らかな日本との違いが見えてくる。

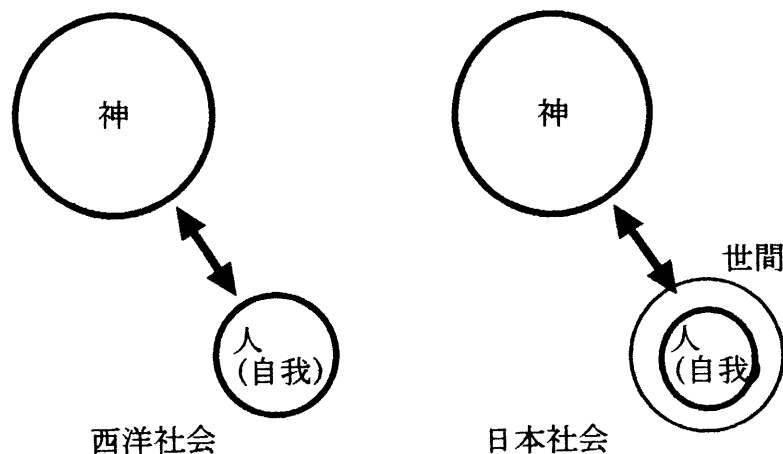


Fig. 1 日本と西洋における神と人との関係

また阿部謹也氏は、その著書“「世間」とは何か(講談社現代新書)”の中で、日本における“世間”の役割について考察をおこなっている[4], [5]。またゲーテ学者である小塩節氏は、その講義[6]の中で、「西洋において神と個人(自我)とは、1対1の関係であり、日本では、神と個人の間在世間がある。」と説明している。彼によれば、西洋と日本の人と神(自然)との関係は、Fig.1のように説明され、日本人は、世間に包み込まれているのだと言う。世間は、日本社会にある重要な概念であり、前述したISOのブームもむべなるかなである。以下では、西洋と日本それぞれの思想とISOとの関りについて考えたい。

3.2 ISOの思想と西洋社会 -法社会との比較-

前述したように、西洋思想には、“法(契約)”の概念を基盤とする社会である。また、ISOは、紛れもなく異なる社会(国)を一つの目的に束ねることを目標とした国際法的規則であり、国や文化を包括する考えに色濃く影響されている。最近の国際的な取り決めの例では、京都会議やブエノスアイレス会議に代表されるCO2削減問題があるが、各国の努力目標という形ではあるものの、比較的“法”に近い具体的な拘束を要求するものであった。しかし一方で、“ISOの思想”は、前述したように、各構成組織の自主性を前提としたものであり、法による拘束とは大きく異なる。まず、我々の主張に深く関わる“ISOの思想”を明確にするために、この思想と従来の法社会や経済原理中心の社会との比較をおこないたい。

法社会は、社会の中に許される行動の範囲を厳密に定義する。これは調度、社会の中を合法的領域と非合法的領域に分けるのに似ている(Fig.2(a))。この境界は、リジッドであり(法の解釈が入る以上、本質的にはアバウトなものではあるが)、法そのものが改正されない限り、この規則から外れることは許されない。一方、現代社会は、その枠組の中で、資本主義の経済原則にのっとり、強力な貨幣パラメーターの下に、“効率”や“価格”といった同じ方向での自由競争が繰り広げられている。

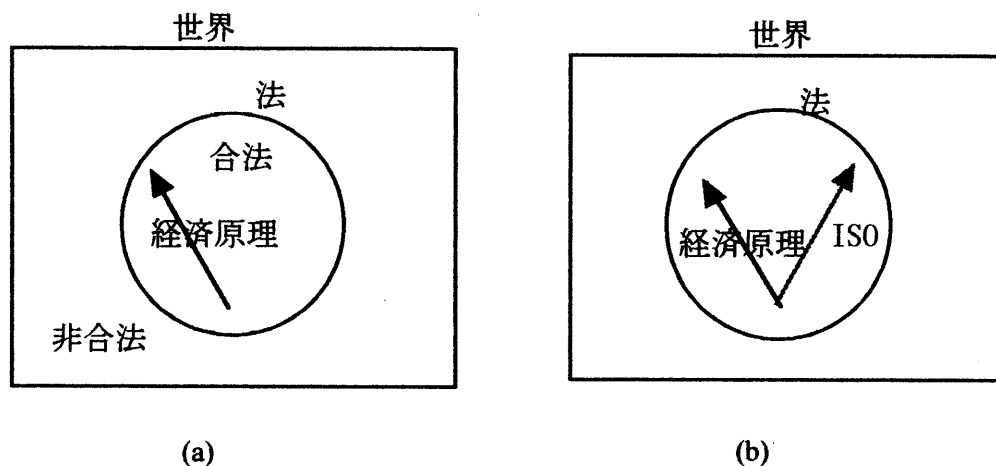


Fig. 2 西洋の法社会, (a) 法による区分と, (b)ベクトル化

一方、ISOの思想は、各組織が、自ら規則や目標を取り決めており、その能力に応じて責任を持てる範囲が定まる緩やかな、そして変更自在な柔らかな枠組を持つ。また、ISOが目標とするベクトルの方向は、経済原理では見忘れられがちな品質管理や環境保護であり、社会に貨幣とは別な価値を持ち込む試みである。しかし、後述するように、ヨーロッパでは、炭素税に代表されるように、環境負荷を経済原理にリンクさせる試みや、LCAやFirst Runner方式などの導入による、自主的試みの定量化や序列化が進んでおり、ISOの取り決めさえ、社会を同一方向に向けるベクトルとなりかねない状況である。環境を厳格に保護する目的のためには、この方向も是認せざるえないのかもしれないが、法律や貨幣同様、自由とは相反する価値下のシステムではある。

炭素税やリサイクルなどをいち早く取り入れたドイツは、この典型であり、リサイクルなどを点数制にし、経済原理に組み込むことにより、別なパラメーターによる社会の誘導に成功している。ドイツの社会を図式してみれば、Fig.2(b)の様になるのだろうか？経済一辺等**の現代社会においては現実的な解決策には違いないし、たとえ経済軸には沿った形であれ、その目盛りの区切り方にその時々自主的な意志が入るとすれば、これも立派なISOの思想に則ったシステムと言えるかもしれない。現実の社会システムに翻弄される他国(日本も含めた)の人を後目に先頭を走ってきたヨーロッパ的なすごさと言えよう。いずれにしても西洋は、自然や社会の隅々に人の手の加えた後が見える社会である。

3.3 ISOの思想と日本社会 -世間との比較-

次に、日本の社会において、ISOの思想は、どのように位置付けられるだろうか？といっても、ISOのブームがここ1,2年にすぎない日本において、このテーマを語るほど社会は、何かの結果を残してはいない。以下に述べる事柄は、今後の日本社会を占うものでしかなく、単なる予測である。

日本は、聖徳太子の十七条の憲法にも述べられているように、“和を以て貴しと為す”国であり、“和”=“輪”=“世間”となって、日本の人々を覆っている。世間の輪は、法律のようにリジッドではなく柔らかかであ

るが、一方、法律以上に生活の隅々までに関与する。この様子を図示すると、Fig.3(a)のようにならうか？世間の輪は、厚みのある”層”のような垣根を外界との間に造り、人と世界との直接の接触を妨げる。そのため、多くの日本人は、世間の色に染められ、個性をつぶされた、均質な村社会を作ってきた。

そんな中で、世間に対する”建前”と、その裏に”本音”が人々の意識にはあり、目に見える建前さえも、本質的な主体として、日本社会に根付かないことになる。調度、国際化を叫ぶ日本が、結局は、英会話スクールに通うだけで、外国人と深く付き合うことが出来なかったり、自然保護を訴える一方で、ダイオキシンをまき散らし、産業廃棄物を不法投棄してきたようなものである。企業の ISO 導入にしても、とりあえず”品質管理”や”環境保護”にポーズをとるための建前にすぎないのではないだろうか？自らが目標を設定する ISO は、”本音”（経済原理以上に ISO の目標を重視しないという姿勢）の絶好の隠れ蓑にはなっていないだろうか？（企業の中には、ISO の導入を世界市場から閉め出されてしまうという、極めて経済的な理由を動機付けとする本音さえ見え隠れするが、これは経済原理どっぶりの旧態依然とした立場以外の何者でもない。）

明治維新以降、西洋の科学技術文明や市民社会にさらされた後にも、日本社会の中に、”世間”は脈々と生き続けてきた。結局は、これら外来の概念を、外套のように身に付けただけで、世間の外に置いて付き合ってきた。しかし、これは、必ずしも何も悪いことばかりであるとは思っていない。この仕組みのおかげで、外国の文化の”良い部分（使える部分？）”だけをうまく消化し、日本古来の”ものの考え方”や伝統は守られてきたのだ。しかし、本当の意味での民主主義は育っていないし、自然（科学）だって、利益に結び付かない限り、本当には理解したいとは思っていないようだ。ISO の思想も、少なくとも現在は、世間の枠組の外に位置しており、品質や環境を守る手段として、本気で語られてはいないのだろう。

そんな均質な日本社会の中で、経済原理も同様に、歯抜け状態であり、既得権の中にあぐらをかいてきた。ここでは、みんなが中流であり、正面をきった競争は存在しない。経済原理に”聡い”産業界ですら、お役人の調整により、みんなが仲良く繁栄することができた。（筆者は、これも必ずしも悪いとは思っていない。おかげで、世界で一番安全で、ぎすぎすしない社会が保たれていし、ひょっとすると他の国が願っても成し得ないある意味で貴重な社会なのかもしれない。しかし、新規事業の参入やベンチャーは育ちにくいだろう。）多分、LCA などの評価が入ったところで、全員が世間を気にしながら、同じくらいの取り組みを見せ、過度な競争にならない様に牽制するだけだろう。日本の社会には、西洋のような自らの意志による明確な方向づけはなく、強いて言えば、他者である政府の指導や外圧による変革があるのみかもしれない（Fig.3(b））。そして代わりにあるのは、目に見えない、誰が決めたのかも分からない”世間の雰囲気”なのだ。

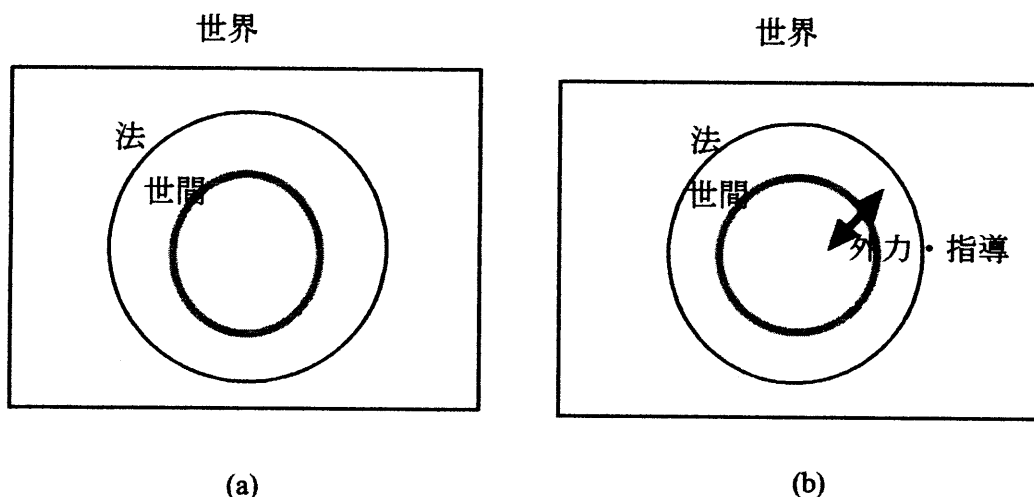


Fig. 3 日本社会における社会構造, (a)法と世間, (b)世間の柔構造

現在の日本においては、品質管理も環境保護も、”世間”のシステムの中で有効に働いている。周りの同業種企業の合わせた結果、良い製品が作られ、近所の目を気にして、マナーの良いゴミの回収がすすんでいる。現在、ISO の制度が追求しようとする社会の誘導は、日本においては、”世間”が担っており、高い達成度を示しているといえよう。そして現在の ISO のブームも世間の枠組から生じているとすると、公共事業関連会社の ISO9000 取得やイメージ戦略としての ISO14000 取得の行く先は、自ずと見えてくる。”日本における”ISO の思想”は、”世間”の形で取り込まれる、これが我々の ISO 制度に関する予想であ

る。しかし、果たしてこれからの日本も、ISO の精神を”世間”の外に置く、建前だけの付き合いで良いのだろうか？以下の章では、日本社会の構造をさらに考察することにより、日本社会があるべき”ISO の思想”との関わりについて考察していきたい。

4. 日本社会における ISO の形

4.1 日本社会の協調現象

私ごとで恐縮だが、ほとんど毎朝、町内の収集場にゴミを持って行く。最近になって、資源ゴミの回収が始まり、分別も相当に細かい。また、ゴミ袋も透明になって、プライベートは仲々守られない。困惑はするものの、それでも、町内の人全員が、正しく規則を守っている姿には感心させられる。この様な、規律正しさが、厳しい罰則もない状況で存在する社会こそ、”世間”をもつ日本の特徴であり、世界における国の個性なのだ。

前章より述べてきた”世間”は、構成員にとって身近な他者からなり、例えば、近所に生活する住人であり、産業では、同業社組合であり、大学では、同じレベルにあるとみなされる他の大学群である。世間を構成するものは、人の意識であり、自らと他者との関りである。以下、この相互間の現象を、強磁性体や強誘電体などにみられる協調現象とのアナロジーから、日本社会の協調現象と呼ぶことにしたい(Fig.4)。日常に使用している磁石(強磁性体)は、内部のおのおののスピンの隣接する他のスピンと同じ方向に向くほうが安定であるため、全体として同じ方向を向き、強い磁性を発現する。日本の社会も、世間によって、隣接するものが同じ行動を取り易い傾向にあり、これが集団行動となって表れる。この国では、”赤信号、みんなで渡れば怖くない”のである。それでは、この社会の協調現象は、ISO の思想とどのように関わっていくのだろうか？

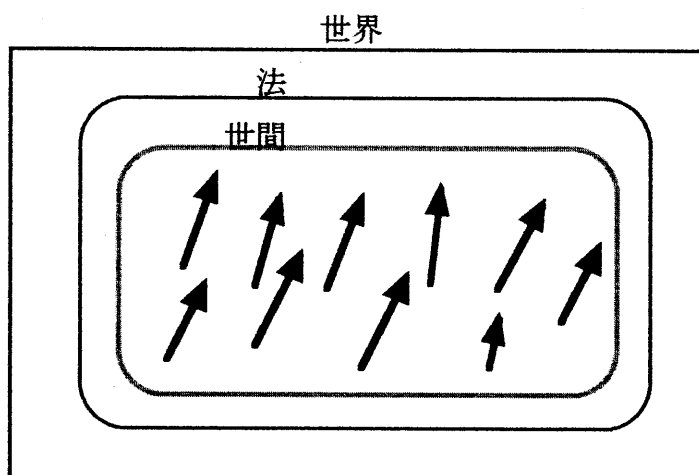


Fig. 4 日本社会の強調現象

4.2 日本社会の個性化

4.2.1 日本社会の目指すもの

明治維新後、日本社会は、急速な中央集権化が進んだ。これは、世界的な国家主義の流れから逃れられなかった結果なのだが、これと同時に、平安時代末期から続いた封建性による地方の分権制度は崩壊した。そしてその結果として(?)、今日の繁栄があるのだが、それも近年は、日本全体を覆う、悪平等、没個性、非創造的社会として批判の矢面に立たされている。日本全体が比較的均一な社会であることは認めるとしても(そして、国としては十分に個性的であると認めるとしても)、個性のない日本人と言う姿は、我々の本来の特質なのであろうか？ここで、”個性”と一口に言うには、この言葉は十分に危険である。ここで指す個性とは、単に他者と異なることではなく、後で述べるように、自らの定めた規範により、自らを認めた末に自己実現の結果として表れた多様性のある状態を指す。(これでは、自己欺瞞に陥るとの指摘があるかもしれないが、それについては、最後の章で述べる。)周囲の目を執拗に気にする日本人は、だから、個性的とは言えないのである。個性や自我は、近代社会以降の西洋からの輸入の概念であることを知れば、むべなるかなの思いがする。

筆者は、日本社会の個性化が将来のあるべき日本の鍵を握るのではないかと考えている。そして、今日

叫ばれているような“競争化”が、日本の姿を決して良くするものではないと信じる。そして日本は、良い意味で文化を残したまま、個人個人が個性的な社会になり得ると信じる。それでは、日本は、どのようにして、個性的な個人を取り戻すことができるのだろうか？ここでは、個人個人の個性化を述べる前に、協調現象に見られる限られた単位の中での個性化を先に述べたい。

4. 2. 2 世間における協調現象とドメイン化

協調系においては、同じ方向を持つ構成体が集まってドメイン(領域)を作るが、さらに様々な方向を向くドメインが、マクロ系全体の組織を形作る。つまり、協調現象の成り立つ系は、必ずしも単調な社会を形作らない。300年近く平和が続いた江戸時代は、ともすると幕藩体制による中央集権国家であったように受け取られがちではあるが、基本的には、租税を領主である各藩が管理する分権国家であった。幕末にパリ万国博覧会に出展した薩摩藩や肥後藩が、幕府同様に国(藩)の代表として参加したことは、こうした意識の表れであろう。要するに、この時代の日本は、各藩が独立なドメインを形作っていたことになる。これは、天皇制や室町幕府もそうであったように、中央による統制が緩やかであったことによるものと考えられる。

翻って、明治以降の日本は、中央集権化が進み、各地方にあった有形・無形の境界は、取り払われ、この1世紀余りで、国全体を一つのドメインとしてモノトーン化する方向に作用してきた。これにより、日本文化、特にそれを構成するドメイン(地方自治体)一つ一つが無個性化し、モノトーン化してきた。近年叫ばれている地方の分権化も、この線から、国内に、複雑なドメインを再生するための、有力な手だてとなるかもしれない。ただし、ここで重要な点は、いかに中央官庁が統制を緩めるかとともに、いかに各ドメインが自らの価値観を創造していくかに掛っている。熱揺らぎだけでは依らない、内部に意志を持った方向づけが必要なのかもしれない。日本企業が、いま一つ個性化が妨げられてきたように、形だけの分化がおこなわれても、中央の力が強く、自らの価値感が希薄な場合には、これは形骸化しかねないだろう。

後述するが、ISOの思想によるシステムが、真に自主的に組織体の境界を作る手法として機能した場合、ISOの思想は、組織をドメイン化(小グループ化)し、個性化を助けるシステムとして機能するものと考えられる(Fig.5)。このためにも、自発的な組織の価値をいかに見だし、評価するシステムの運営そのものが、重要な鍵を握ることとなるだろう。

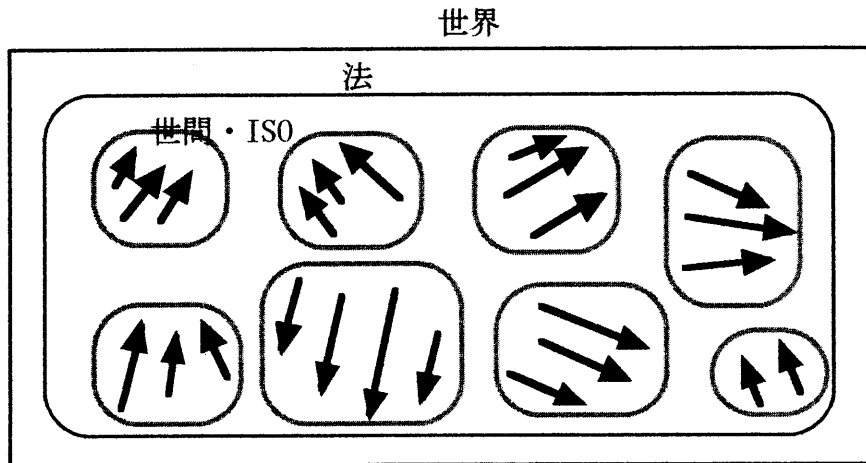


Fig. 5 日本社会のドメイン構造化

4. 3 日本人個人の個性化

前節では、社会をなす小グループの個性化について述べてきたが、これを構成する日本人一人一人の個性化が、最終的には、重要になることはいうまでもない。フランスなどでは、国民一人一人が、極めて個性的、さらには個人主義的であり、世間と同じものが、たとえあるにしても、極めて小さい。この日本人の世間への依存は、いったいどこから来るのだろうか？

竹田青じ氏は、その著書[7]の中で、西洋人の独立したものの考え方の根底には、哲学があり、日本人は、それが無いために、自分の行動規範を周囲の人の評価に頼ってしまうと言っている。つまりこれが世間であり、日本人は、周囲から独立して自己を評価することができない。

一方、日本における世間は、非常に柔軟であり、時代の変遷と共に、またその状況により、枠組を変化させてきた。第二次対戦後の“鬼畜米英”から“親米”への急激な意識の変化や、数年前までは白眼視さ

れかねなかった”茶髪”が、ブームになるなどの大きな逆転現象は、世間という枠組の曖昧さの例といえよう。経済における急激なバブルや、また急激な落ち込みは、共通な意識(”世間”)の急激な変化に振りまわされて、日本人全員が協調現象を起こした結果なのかもしれない。”人様に迷惑をかけない”といった日本人が共通に持つ意識に代表される”世間への迷惑”の基準は曖昧であり、明確な行動規範とは成り得ない。そんないいかげんな”規則”に我々は振りまわされているのかもしれない。

翻って、ISO の思想は、自己による目標の設定と、その実現のための自発的な努力を必要とするものであり、日本人の持つ周囲に対する依存心とは大きく矛盾する。しかしながら、世間の枠組が、環境保護やリサイクル、省エネへと形を変えることにより、前述したゴミ出しのように、全員が統制のとれた行動ができるのも日本である。これは、日本人の世界にまれに見る特徴であり、ひょっとすると良さなのかもしれない。このまま、日本社会の利点を存続させ、世間による柔らかな変化を期待するのも、日本社会の取り得る一つの道であろうが、今の曖昧な世間のままでは、危険であることは前述した通りである。

筆者は、”ISO の思想”をより強固にするためにも、多少とも自己の価値観や自発性を重視した、個人個人の哲学に基づく行動規範が存する社会へと変貌して欲しいと考える。そして、現在の緩やかな”世間”の枠組を残していても良いから、組織の中にさえ、自らを評価し、自らに規範を与える”独立自尊[2]”が息づくシステムを構築することが望ましいと考える。従来の”世間”の枠組が極めて曖昧であった理由に、”世間”の外にその評価を頼っていた(例えば、日本社会におけるアメリカ)ことが挙げられるが、自らの内に自己評価をもった自発的な仕組みを形作ることにより、この”世間”は、良い意味での”個性化”が成し遂げられるように思われる。

これは、広い意味で、これからの日本が模索すべき社会や教育の問題とも関連するだろう。自発性を重視した社会に代わることにより、均質で個性の無い、しかし一方で、過度な競争が存在する社会は、多少なりとも変化するものと期待される。これは、現在変革を迫られつつある大学の組織や、その組織が目指す教育理念とも大きく関係するものと思われる。

5. 競争社会から個性化社会へ

5.1 変革の波

近年、日本は、長引く不況からの脱却を目指して、50 年体制後、最大の変革期を迎えようとしている。この危機感は、”世間”の働きにも助長されて、人々の意識にも大きな影を落としている。大学も地方自治体も、この変革の中にあり、その主たる主張は、競争原理の導入にあるように思われる。永く日本は、平等化社会にあり、構成員に多少の差は認めても、基本的には平等な立場であることが、暗黙の了解であった。例えば、地方大学には、多少の学部やカリキュラムに差はあっても、入学者にとって、偏差値やロケーション以外に、主たる選択の動機付けは起こらなかった。(一方で、異なる世間の間には格差があり、その点、”土農工商”的な階層社会でもある。)

大学審議会の答申がそうであるように、ここで提案されている競争化社会は、競争そのものが目標ではなく、より個性化するための手だてであると考えられている。なるほど、現在の盲目的に平等な状態に比べれば、何らかの方法で評価をおこない、組織間で競争が始まれば、組織自身、何らかの変革を余儀されなくなるだろう。しかしながら、評価は意図的なベクトルを伴うものであり、偏差値ではないにしても、例えば論文数や特許数のような新たな序列化を産むだけかもしれない。受験競争や、経済原理による価格競争がそうであるように、競争は、全体の個性化を産むどころか、個性化をはばむ要因になりかねない。

本来、個性化とは、規制や方向づけのない自由な空間の中で、自己自身の発案・選択により進むべきものであり、競争は、変化のモチベーション(動機づけ・駆動力)にはなっても、方向を定めるものであってはならない。そうでなければ、全大学の行き付く先は、極めて曖昧な”世間”や官僚のその時々の評価に振りまわされる、個性の無いモトーンな組織群になってしまうかもしれない。競争原理の導入を 100% 否定するものではないが、単一な評価基準のもとに外部から評価を与えることは、むしろ個性化を疎外するかもしれない。

5.2 ISO の思想と日本社会の自立

それでは、社会発展のモチベーションを保ちつつ、多様性を損なわないためには、どういった工夫が必要であろう。競争原理により個性化を育てようとする従来の考え方が、大いに疑問であることは、前述した通りである。むしろ、まず個性化そのものの発展を重視する必要があると考える。ここで重要なのは、ISO の思想であり、自発的な自己選択による自己目標の確立を通して、組織一つ一つが依って立つところを自らの内に作り、これを明確にすることにより、個性化を促すことにあると思う。成員や組織一つ一つ

が、自主独立な思想を持ち得ることにより、外部からの単一な価値による組織間の比較や序列化は意味がなくなり、行きすぎた競争は緩和されると考えられる。

しかしながら、この自発的な組織の自己発展を日本社会に望むことは、従来までの”世間”の文化からは大きく矛盾する。夏目漱石は、その著書「現代日本の開化」の中で、「西洋の文化は、内発的であり、日本の現代の開化は外発的である」と喝破した[8]。日本における従来の”世間”像は、保守的であり、その柔軟にみえる変化も外圧によるものに反応しているにすぎなかった。しかしながら、日本社会は、国際社会の一員として、益々重任を負う必要があり、もはや閉鎖社会を堅持することはできなくなった。そのため、ルース・ベネディクト[9]の指摘した”恥の文化”は、次第に形を変えざるおえないだろう。

もし日本社会の変革が必要であるとすれば、競争原理の導入よりもむしろ、この内発的な自己改革の習慣やシステム作りが先決であり、従来の”世間”をこの点から”変える”ことが必要であろう(Fig.6)。ISOの思想は、なるほど西洋的な考えのエッセンスであり、ISO9000や14000の導入が社会に認知されようとしている今、この基本的な思想を理解することは、日本社会の変革において重要な役割を果たすと考えられる。日本における”世間”の概念は、社会の”和”を保ち、平等で安心しあえる社会を構築してきたが、緩やかに自発的な変化を達成していけば、”世間”に覆われた組織の一つ一つは複雑なドメイン構造を担うようになり、ひいては社会や個人の個性化が達成できるものと期待する。

5.3 組織の自我論 -”I”と”me”のある社会-

今までの議論から、組織がそれぞれに自主独立であることの大切さは、十分に強調できたものと思う。しかし、自らが作った規範に従うばかりでは、周囲の状況や時代を無視した一人よがりな組織にさえ成りかねない。また目標ばかりの掛け声では、具体的な処方箋が見えてこない。組織の個性化は、擬人的な表現であるが、同様に、個人の議論を組織に拡張・適用することは、今回の場合、有効な手段を与えうるかもしれない。

アメリカの哲学者で、”創発(emergency)”の概念や社会心理学の創始者として知られる G.H.ミード(Mead)は、”自我”に対しても大変ユニークな考えを残してくれている[10]。 ”自我”の概念は、西洋的であり、ルネッサンス以降の人文主義や個人の権利の自覚とも大きく関係しているが、これまで述べてきた個性化に必要な内発的な仕組みは、個人で言えば、”自我”が存在とも言い返ることができるかもしれない。ミードによれば、人の自我は、二つの構造(”I”と”me”)からなり、これらが成長と共に発展・分化することによって、独立した個人となるという。彼の定義する”I”は、個人の主体そのものであり、”me”は、親のしつけや社会の規範を代表した形で、個人の心の中に持ち続ける”外部”である。 ”me”は常に”I”を評価・監視し、”I”は”me”に沿うように努力し、時には、”me”自身を説得してその変革を迫る(”I”は、フロイトの言う自我、”me”は超自我に対応するのだろう)。

自らの中に”I”とは独立な”me”を持つとするこの”自我”の構造は、ISOの思想のありかたや組織の個性化とはなんであるかを具体的に教えてくれる。組織も、個人と同様に、組織自身の”自我”を持つべきであり、そのためには、自らの中に”me”的な仕組みを作るべきかもしれない。一人よがりな個性化が進んで、周囲との摩擦を起こさないためにも、この”世間”や”社会”や”神”を含んだ存在である”me”が、調整役を果たす必要がある。しかし、その仕組みとどう造るのが最も難しい問題ではある。

従来でも、組織の中には、自らを評価・批判する仕組みが存在した。企業で言えば、投資者サイドに立つ”株主総会”や労働者サイドに立つ”労働者組合”である。しかしそれらは、特定の利益団体の代表であったためか、組織全体を導く存在ではなかった。一方、組織の中に、また型にはまった組織を作ることには、身動きがとれない集団を増やすばかりで、建設的な”me”的存在とはならない可能性がある。むしろあまり形によらない、構成員や関連者からなる、率直な意見の交換の場が、”me”には適していると言えるのだろうが、具体的にどんな形が良いのかは、試行錯誤に頼らざるえない。近年、はやりの自己組織化が、何かイメージに近いような気もする。様々な状況に対応する健全な”me”を育てることは、口で言うようには簡単でないが、自立した個々の組織が創意工夫をし、ISOの思想を具現化するためにも、これらの取り組みは重要であろう。

本文章は、ISOの思想の根本にある自発的な自己変革を通して、議論は組織の個性化にまで言及するに至った。近年は、個人から大学組織にいたるまで、あらゆる段階で”個性化”を是とし、推し進めようとする動きが活発であるが、”個性化”は、”一人よがり”や”自己満足”にもつながり、一概に良いと言えるものではない。しかし、周囲に依存しすぎる”個性”など、これまた存在はしない。前述したように筆者が考える”個性化”とは、”me”の中の”世間”が、”I”と意見を一致させるまでの、相互のコミュニケーション過程であり、あくまで組織の内の作業であると思う。そして個性化した組織や個人は、自らを厳しく律することによ

り、社会と良好な関係を結ぶばかりではなく、これを導く”教養のある[5]“存在であればと思う。

自発的な日本社会に変わるには、構成員一人一人の意志と、教養の高さが問われる。システム内部での自由・平等な議論と、構成員の意志が一致した時、”ISO の思想”に沿った自発的社会が出現するものと期待される。自発的システムに身を委ねることは、自由である反面、多大なる責任を負うことになる。性善説 (ISO の思想) でいられるか、性悪説 (法) で縛られるかは、構成員一人一人の自覚と努力にかかっているとと言えるだろう。

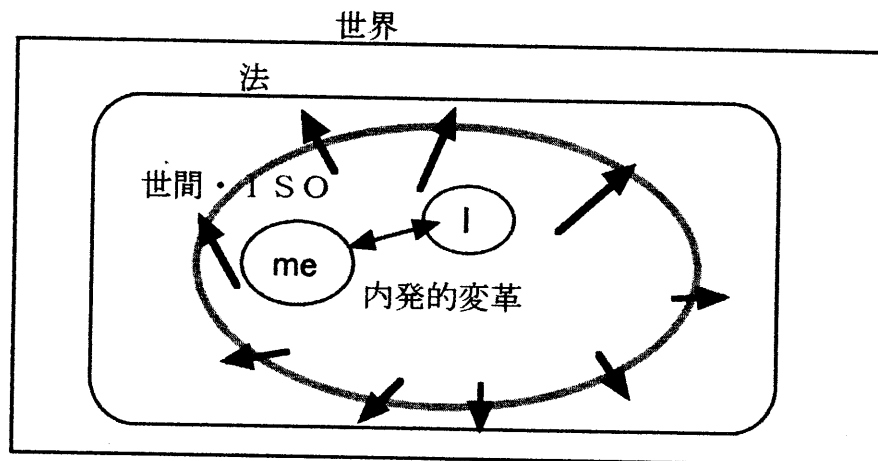


Fig.6 日本社会の内発的変革

6. 最後に

ISO の思想の根底には、西洋流の自発的社会的存在がある。我々も、ISO の認証取得だけに価値を置くばかりではなく、これの根底に流れる思想を理解し、日本文化との対比から、良い点を積極的に受け入れていきたいと思う。近ごろの ISO9000,14000 シリーズの導入が、ISO の思想を理解するきっかけとなり、日本においても、自主独立の気運が高まり、新たな社会構築が実現すればと期待したい。また、筆者が所属する大学という組織も、自発的自己変革こそが、あるべき姿であり、そのために組織内で十分な議論がなされることを願う。

最後に、本文章は、地域共同センターで行われた“ISO 学”での成果をもとに雑感的な文章をまとめたものです。この文章のきっかけとなった昼食後の雑談を快く引き受けてくださった三重大学工学部、妹尾允史教授ならびに鈴木泰之助教授に感謝の意を表します。

参考文献

- [1] 大江健三郎, “宙返り”, 講談社 (1999) とその関連講演.
- [2] 福沢諭吉, “学問のすすめ”, 岩波文庫 (1942).
- [3] エマニュエル・カント, “実践理性批判”, 岩波文庫 (1960).
- [4] 阿部謹也, “「世間」とは何か”, 講談社現代新書(1995).
- [5] 阿部謹也, “「教養」とは何か”, 講談社現代新書(1997).
- [6] 小塩節, “愛の詩人ゲーテ(ヨーロッパ的知性の再発見)”, NHK 人間大学 (1998).
- [7] 竹田青嗣, “自分を知るための哲学入門”, ちくま学芸文庫(1993).
- [8] 佐々木力, “科学論入門”, 岩波新書(1996).
- [9] ルース・ベネディクト, “菊と刀”, 社会思想社 (1967).
- [10] G.H. Mead, “The Social Self” in G.H. Mead, Selected Writings, Indianapolis, Bobbs-Merrill (1964).